黎明館企画特別展「古代ロマン北南～三内丸山 VS 上野原～」関連行事資料集
シンポジウム「熊襲・隼人の時代を語る」
2009 年 10 月 24 日　鹿児島県歴史資料センター黎明館

古墳研究と熊襲・隼人

橋本　達也

１．鹿児島の古墳はどのように位置づけられてきたか

近年の鹿児島の考古学の成果を総括したものとして、鹿児島県教育委員会が 2006 年に刊行した『先史・古代の鹿児島　通史編』がある。これのみが鹿児島の古墳に関する理解を代表するものではないが、県としての公的刊行物であり、『県史』にも匹敵するものでその役割は重い。この「第４章　古墳時代」には以下のような記述がある（上村 2006）。

①「古墳時代の南九州には畿内地方から伝播してきた高塚古墳（前方後円墳、円墳など）と熊襲・隼人の墓制とされる地下式板石積石室墓、地下式横穴墓、土壙墓などがある」「古代の南九州には、熊襲あるいは隼人と呼ばれ、中央の人々から異民族視された人々が居住していた」

②「考古学資料と文献資料（ママ）との両面から検証してみると、熊襲は大和朝廷に征服される前の、隼人は大和朝廷に支配された南九州の人々を指していると考えられる。５世紀代を境に熊襲と隼人の呼称の違いが生まれたと考えられる」

③「髪長媛の伝承は、応神天皇のころには大和朝廷の勢力が現在の宮崎県中部地域に及んでいたことを示唆している」

④「日本書紀の伝承記録から見ても、３～４世紀のころの中央政権に抵抗した南九州の人々が熊襲と呼ばれ、中央政権に服属した５世紀代以降に隼人と呼ばれたと見て良いであろう。考古学上の成果からも同じような見解が出来るようである」

⑤「大和朝廷の全国統一の過程は、前方後円墳に代表される高塚古墳（畿内型古墳）がそれぞれの地域にいつ出現したかによって推定できる。３世紀代に畿内地方に発生した畿内型古墳文化は、瀬戸内海沿岸を経由して伝播し北九州の豊前地域に上陸したあと、二つの大きな流れとなって南九州へ波及している」「志布志湾岸地域では、5 世紀前半代に飯盛山古墳・横瀬古墳・天子丘古墳・唐仁大塚古墳などの前方後円墳が次々に築造されている」

⑥「前者（巨大古墳）の被葬者は、大和朝廷から隼人征討の目的で派遣されたものが葬られ、後者［筆者註－在地の軽石石棺をもつ副葬品の少ない古墳］は大和朝廷に服属した在地有力者（隼人）が、支配者側の墓制を真似ることを許されて葬られたものであろう」

このほかにも検討の必要な記述が多く見られるが、これらからその古墳時代観はおおむね理解できる。そこには以下のような視点が見受けられる。

ⅰ　『記紀』の記す世界観を肯定的に引用し、考古資料をそれによって説明している。

ⅱ　古墳時代墓制の形式が民族を表していると捉え、それに「畿内」・「中央政権」、「隼人」・「征服」・「服属」など意味を与えている。

ⅲ　隼人の征討と古墳の出現を関連づけて 5 世紀に画期を見出して説明している。大隅における古墳の出現を古墳時代の開始よりかなり遅く理解している。首長系譜の変動などは議論されていない。

２．『記紀』と考古学研究史と熊襲・隼人

上記のような考古資料と『記紀』の熊襲・隼人を結びつける理解は、1960 年代にはおおむね形をなしており（小田 1966）、1970 には乙益重隆によって明確に語られている。その後、上村俊雄などによって一貫して継承されてきた見解である。

古墳時代の研究史　考古学的な研究資料の少なかった時期、あるいは考古学からいかに過去の社会を復元するかという研究の少なかった時期には、古墳時代の社会の説明に『記紀』は多用されてきた。

そのなかで小林行雄はもっとも精緻で高度な研究を組み立てた。おおむね 1960 ～ 70 年代以前が中心であろう。小林の論集、小林 1961・1976 に収録された論文に代表される。小林はきわめてすぐれた多くの研究を残したが、その後、考古学的手法でいかに歴史が復元できるかという問題意識が高められるとともに、文献史的研究の進展によってその利用の危うさが考古学においても意識される。そして 1980 年代には考古学による古墳時代像の提示が形をもって現れる。

その代表は 1983 年の近藤義郎『前方後円墳の時代』である。ここでは『記紀』を超克した新たな古墳時代像が提示された（近藤 1983）。さらに、川西宏幸 1988 などもあり、この時期急増しつつあった考古資料を背景に個々の論文等ではさらに考古学的な研究手法の尖鋭化が進められた。一般的に考古学の復元する古墳時代社会はもはや記紀の描く過去を安易に受け入れるようなことはなくなった。

さらに、1990 年以降、都出比呂志によって前方後円墳体制論が展開され、諸外国の考古学による初期国家研究の成果を踏まえた古墳時代史像が問われるようになる。古墳時代社会の特質が世界的な国家形成史の理論研究との比較の上で議論されるようになった。その成果は都出 2005 にまとめられている。また、この時期には近藤義郎が主導した『前方後円墳集成』が刊行され、共通編年の構築とともに古墳資料の総覧が可能となり、古墳研究の全国的な基準と資料が調っている。その後も白石太一郎・和田晴吾・広瀬和雄などによって古墳の分析に基づく、古墳時代社会像を描く方向性は続いているし、各地域ごとの古墳編年、資料分析も盛んに行われている。

古墳時代の民族論と地域間関係　鹿児島の古墳を説明する際には熊襲・隼人を所与のものとみなし、疑いなしに古墳時代墓制に民族を当てはめていることが一般的に行われてきた。はたして、古墳時代の墓制は民族を表すだろうか。この根本的な問いに、近年の考古学は懐疑的である。

藤沢敦は東北地域の古墳研究を近年飛躍的に進め（藤沢 2001・2003・2007 など）、古墳と律令国家の異民族・蝦夷とは対応せず古墳時代の間に境界領域は変動しすること、古代国家とでは境界に質的な差があることを明らかにした。

大久保徹也（大久保 2002）は四国北東部を軸にしつつ、全国の前方後円墳築造動向から前方後円墳は地域ごとに自立的な築造体系があり、地域間関係を持ちつつ地域的政治秩序は並立していることを示した。

もはや、『記紀』の記述のまま、地下式横穴墓や板石積石棺墓に隼人の各「部族」を当てはめるようなきわめて素朴な理解は、現在の古墳時代研究とは大きくかけ離れている。

また一方で、戦前の皇国史観の反省の上に徹底した史料批判を行うことで古代を復元してきた 20 世紀後半の文献史研究の成果にも無頓着であったといって良い。今もって、鹿

児島では考古学研究から古墳時代史像は復元できいないのである。

熊襲・隼人と古墳　『記紀』は考古学においてもすべてを否定すべきものではなく、古墳時代研究にも多くの情報を提供するものではある。しかし、それが古墳時代社会の復元に有効であるという認識はすでに過去のものである。とくに時代をさかのぼるにつれてその信憑性は乏しくなり、6世紀以前の過去にどれほどの史実が含まれているかは、よほどの慎重な姿勢と史料批判が必要であることは文献史のみならず考古学にも常識である。

鹿児島における古墳の評価は、考古学よる古墳時代史研究とは大きくかけ離れて来たといって良い。とくに1980年代以降その距離が開いてきているといえよう。

３．明らかになりつつある鹿児島の古墳時代

古墳研究ではまず、遺物・遺構の型式的研究と編年、それに基づいた古墳築造動向をまず検討する必要がある。

しかし、これまで鹿児島の古墳時代研究が進まなかったのは、実際に古墳に関する確かな資料がきわめて少なかったため、このような基礎的な研究も十分行えなかったことが背景にある。発掘調査による資料が少なく、地下式横穴墓などはある程度調査事例があっても、出土遺物が少なく編年的位置づけすらよくわからない例も多かった。

このようなこともあって、私は2002年から古墳の調査を行ってきた。これまでに鹿屋市串良町岡崎古墳群、南さつま市加世田奥山古墳、曽於郡大崎町神領10号墳と調査を進めてきている。また近年、県内自治体でも古墳や地下式横穴墓などの調査を行い事例は増えている。ようやく､『記紀』を利用せずとも資料に基づいた古墳研究の行える状況が整ってきた。近年の古墳に関する代表的な成果としては以下のようなものが上げられる。

○大隅における前方後円墳の実体解明－神領10号墳・岡崎20号墳・岡崎15号墳
○大隅における古墳出現に関する資料－塚崎43号墳・塚崎25号墳
○古墳に伴う地下式横穴墓の解明－神領10号墳・岡崎15号墳・岡崎18号墳・塚崎31号墳
○広域交流に関する資料・初期須恵器－神領10号墳・岡崎18号墳・塚崎31号墳・下堀地下式横穴墓群・南摺ヶ浜遺跡
○広域交流に関する資料・朝鮮半島系資料－鉄鋌・初期U字形鍬鋤先・鑷子（岡崎18号墳、胡籙（神領10号墳・祓川29号地下式横穴墓）
○地下式横穴墓群の調査－下堀地下式横穴墓群、祓川地下式横穴墓群

これらをもとにいくつかの論点を整理する。

①　大隅においても少なくとも古墳時代前期中葉段階（４世紀前葉～中葉）以前には古墳築造の始まっていたことが明らかとなっている。塚崎古墳群中の前方後円墳はそれをさかのぼる可能性が高く、九州南部を古墳時代を停滞した社会、他地域より相当遅れて「古墳が伝播する」とする視点は正しくない。また、古墳時代前期に限らず情報は徐々に伝播するものではなく、常に同時代併行で連動している。従来、強調されてきた「隔絶」・「孤立的な社会」、「世の進運にとり残された」は当たらない。

②　九州南部の古墳時代社会においても、出土資料から朝鮮半島・琉球列島・瀬戸内・

近畿に及ぶ非常に活発な広域交流が行われていたことが明らかとなっている。閉鎖的な社会ではない。とくに５世紀代は資料が多く明確であるが、5 世紀前葉は地下式横穴墓の出現期でもある。

③　地下式横穴墓自体は九州南部に固有のものであるとはいえ、それは交流の不活発な閉鎖的な社会に生み出されたものではなく、広域交流を背景としてさまざまな情報がもたらされている中で生み出されている。過去には地下式横穴墓を「土着文化の所産」ともみなしたが、これをを単なるローカルな墓制としてみることは正しくない。筆者は朝鮮半島を経由して伝わった横穴系墓制の情報に基づき生み出された墓制だと考えている。

④　前方後円墳や円墳と一体のものとして築造されている地下式横穴墓も判明し、墓制が集団と同一ではないことが明らかである。古墳を畿内からの伝播、地下式横穴墓を在地墓制・隼人の墓制などとして、墓制に民族を当てることは適切ではない。古墳被葬者の近親者を地下式横穴墓に埋葬する場合があるとみられ、また宮崎市生目７号墳といった地下式横穴墓を主体部とする可能性がある前方後円墳なども確認されている。

⑤　地下式横穴墓や板石積石棺墓は５世紀代のものが多く、６世紀代以降のものは少ない。５世紀代は本州でも古墳以外の墓制が存在するなど、列島各地で地域ごとに特徴ある埋葬施設の採用が広く見られ、九州南部の墓制のみを取り上げて独自性、異質性を強調することは適切でない。多様な墓制が共存する段階である。九州南部の地域性のみを､熊襲･隼人といった民族性で説明する根拠はない。

そういった地域の個性がより異質なものとなり始めるのは６世紀以降であろう。それが民族性と結びつけられるのは７世紀後半以降だと推測される。

⑥「記紀に見える熊襲征討説話の成立には、こうした畿内系高塚古墳文化の導入の契機となった経緯が反映している」（乙益 1970, p. 99）･「前者（巨大古墳）は、大和朝廷からの隼人征討の目的で派遣されたものが葬られ」た（上村 1991, p. 196）とされたように、前方後円墳や古墳に「畿内型」などの名称を与え､派遣将軍的な被葬者像も描かれてきた。しかし、古墳は地域社会の状況に応じて展開するという社会構造が描かれる現在、古墳時代史像の中で派遣将軍というモデルは描かれていない。

古墳時代においても移住者は存在するだろうが、地域ごとの首長系譜や同時代他地域との地域間関係の中に位置づけ、その移住者が古墳を築造する要因・社会的背景を説明が必要である。個別の古墳を捉えて畿内からの派遣者としても印象論・思い込みに過ぎない。前方後円墳の出現は対畿内の一方向的な「畿内古墳文化」の伝播などで説明されるものではなく、首長系譜の展開と地域間関係の分析が必要である。

⑦　古墳やその他の墓制は７世紀前葉までしか存続せず、鹿児島県域の７世紀中葉以後の考古資料はほとんどわからない。文献史上に隼人が実体をもって存在した７世紀後葉以後とには断絶があり、それらは直接結びつけられない。現在の資料で、考古学は隼人の実体を明らかにはできない。隼人自体が考古資料で問えないからには、隼人前代の実体も解明する手だてはない。少なくとも考古学で隼人の出現過程は問えない。

４．これからの鹿児島の古墳時代研究視点

これまで鹿児島の古墳時代研究史を中心をなしたのが、その多様な墓制を熊襲・隼人に対応させて論じることであった。古墳時代像を提起した 1980 年代以降の考古学研究はほ

とんど引用もされてこなかった。

熊襲・隼人は７世紀後半以降の古代国家の枠組みの中に位置づけられた存在であって、九州南部の古墳時代人の実体ではない。まずは、資料分析に基づいた古墳時代研究が基本である。各種資料の型式学的研究、他地域資料との比較による地域間関係、首長系譜の展開など古墳時代全体の動態の中で地域を再検討する視点が必要である。

それらを通して九州南部古墳時代社会の地域的特質が明らかにすれば、地域の側からの多元的な視点による新しい古代国家形成史像の構築に大いに貢献し得ると思う。しかし、そこに『記紀』の記述を前提とした特殊性を強調したなら、古墳時代社会の中での相対的な評価から切り離されてしまい新たな視点は生み出さない。

これからの九州南部の古墳時代研究に、熊襲・隼人は不要であると筆者は考える。

【文献】

大久保徹也 2002「〈民族〉形成のメカニズムと前方後円墳の論理」『考古学研究』49-3　考古学研究会

小田富士雄 1966「九州『日本の考古学　Ⅳ　古墳時代（上)』河出書房新社

乙益　重隆 1970「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本　３　九州』角川書店

上村　俊雄 1984『隼人の考古学』考古学ライブラリー 30　ニューサイエンス社

1991「墓制からみた隼人世界」『新版　古代の日本』角川書店

2006「古墳時代の概説」『先史古代の鹿児島』通史編　鹿児島県教育委員会

小林　行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店

1976『古墳文化論考』平凡社

近藤　義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

川西　宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房

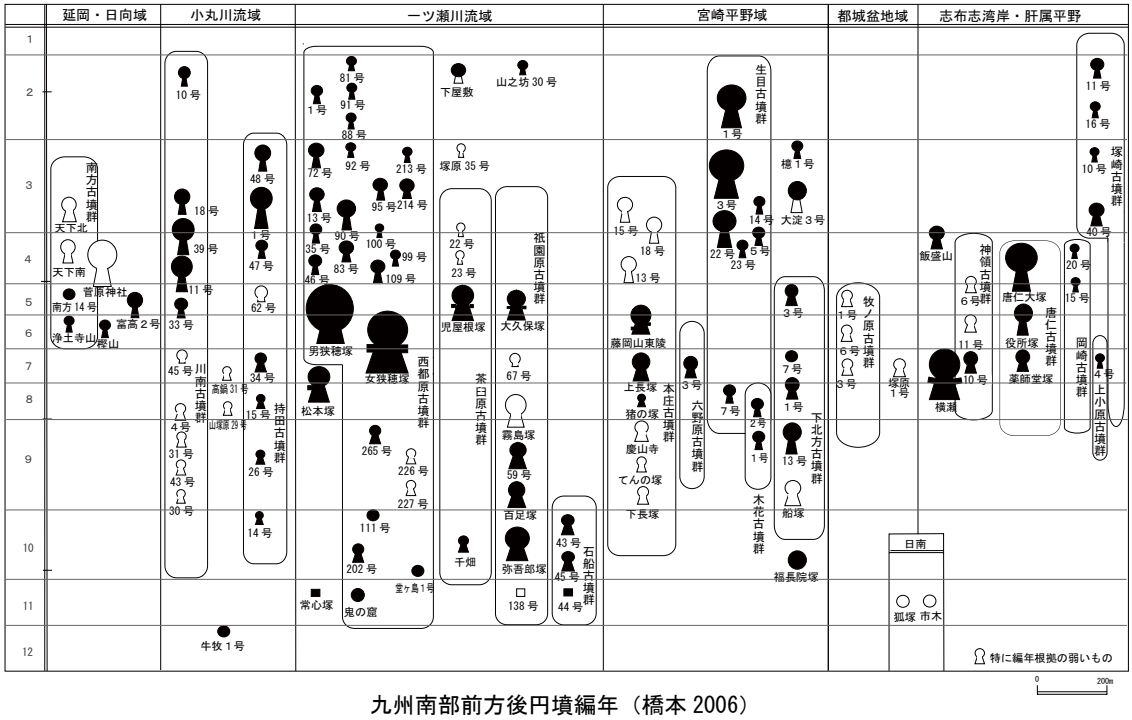
都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制論の提唱－」『日本史研究』343

2005『前方後円墳と社会』塙書房

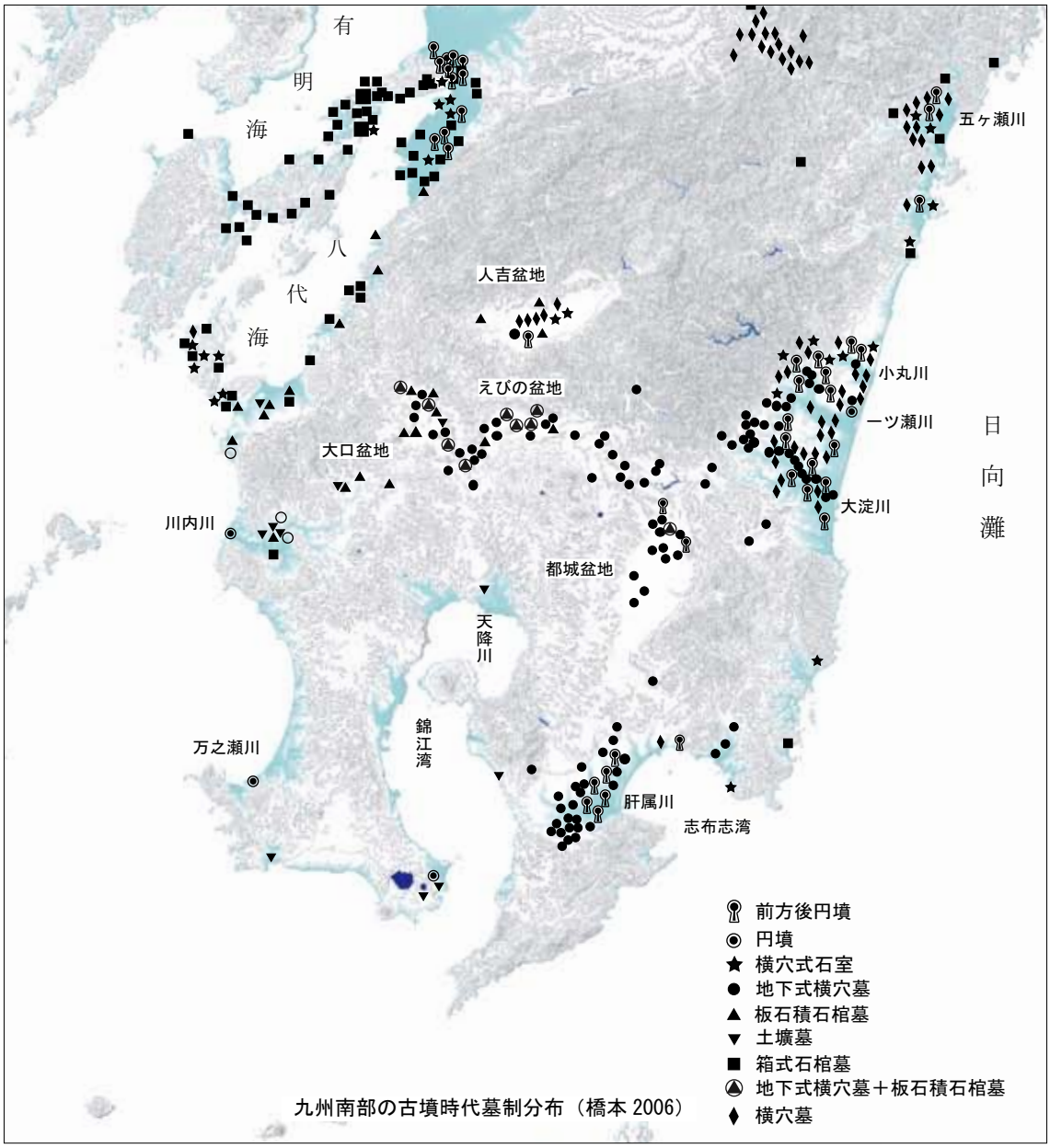
藤沢　　敦 2001「倭の周縁における境界と相互作用」『考古学研究』48-3　考古学研究会

2003「北の周縁域の墳墓」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第６回九州前方後円墳研究会事務局

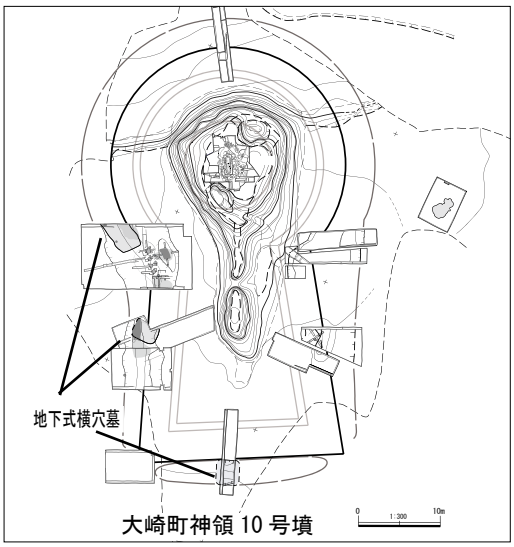
2007「倭と蝦夷と律令国家－考古学的文化の変位と国家・民族の境界－」『史林』90-1



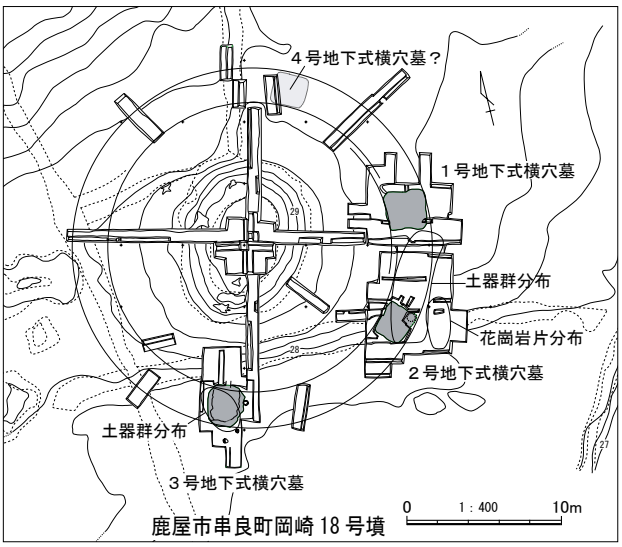
九州南部前方後円墳編年（橋本 2006）



九州南部の古墳時代墓制分布（橋本 2006）



大崎町神領 10 号墳



鹿屋市串良町岡崎 18 号墳